農業の教育的機能を介した都市と農村の共生
――酪農教育ファーム認証牧場を事例として――

M1365335　山　根　温　子

1．研究の背景と目的

大地の上で，自然からの恵みを受けて暮らす私たちではあるが，いまや毎日の生活の中で，土に触れ，自然に親しむことは少ない。子どもたちをめぐる環境もまた，生きるという実感をともなう体験が乏しくなっている。平成14年度から導入された「総合的な学習の時間」では，子どもたちの「生きる力」を育成するため，さまざまな体験学習への取り組みが行われている。

本研究で事例として取り上げた酪農教育ファーム認証牧場（酪農教育ファーム）は，このような体験学習の受け皿として，農業生産の場である牧場を，教育の場としてふさわしい機能と環境を備えたものとし，農業の教育的機能を発揮するものである。

この農業の教育的機能は，農業が行なう食料その他の農産物の供給の機能以外の多面的機能の一つとして捉えられる。グローバルな貿易の自由化等をめざすWTO体制下における農業･農村は，その対応として，都市生活者が「緑豊かな農村地域において，その自然，文化，人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」であるグリーン・ツーリズム（GT）による地域の活性化，並びに就業機会や所得向上を図ることが求められている。酪農教育ファームを行う酪農家を取り巻く環境も，WTO体制下の影響と，さらには牛海綿状脳症（BSE），食品偽装事件などによって，ますます厳しい状況にある。このような環境にあって，子どもたちの体験学習のために，酪農教育ファーム認証牧場として自らの牧場を開放する農業経営者たちはどのような思いを持って取り組み，どのような課題を抱えているのだろうか。

本研究においては，酪農教育ファーム認証牧場の実態と課題を，ヒアリング調査とアンケート調査から把握するとともに，GT先進地であるフランスの教育ファーム視察より得られた実態と課題をもとに，日本における酪農教育ファーム認証牧場の普及・定着に向けた課題とその解決への可能性について考察する。

2．酪農教育ファーム認証牧場の実態と課題

6名の酪農教育ファーム認証牧場関係者にヒアリング調査を行うことによって，経営規模や牧場環境の違いを越えた共通する課題とおのおのの酪農家の酪農教育ファームに対する認識を把握した。また，全国135ヶ所の酪農教育ファーム認証牧場を対象としたアンケート調査を行った。アンケート結果からは，酪農教育ファームが体験学習に望ましい環境をもち，子どもたちに，「酪農をとおして，食についてそして牛乳について伝えたい」という共通した目的をもつことなどが挙げられた。また，課題としては，利用者となる教育関係団体の認識・理解の低さ，体験学習の場としての施設等の整備の必要性，体験プログラムの企画・開発などの課題が挙げられた。

3．先進地フランスの教育ファームとの比較

GT先進地フランスの教育ファームの視察から，フランスにおいては都市と農村の共生が農村観として形成されており，教育ファームへの認識・理解も進み，地域農業・地域行政との連携もなされていることなどが挙げられた。また，今回視察した教育ファームに統一してみられた目的である「食べ物がどのようにでき，生活に関わってきているかの理解を進める」ことは，日本でのアンケート調査結果から得られた酪農教育ファーム活動の目的とほぼ同一であったことは注目すべきことである。

4．今後の課題

本研究における各調査の結果分析から，日本における酪農教育ファームの普及・展開に向けた課題が整理された。すなわち，日本における農業・農村への認識・理解を進める農村観の形成，そして多様な酪農教育ファームに一定の認識と理解をもたらす統一性の必要性，他の地域農業と連携した教育ファームの展開と地域行政との連携の必要性，体験に価値を認める有償制の実現とそれに伴う体験プログラムの企画・開発が求められる。また利用者となる教育関係団体には，体験学習を豊かなものとするための事前・事後学習への取り組みや体験学習における体験の価値をみとめた有償制への理解と支援が求められるだろう。酪農教育ファーム認証牧場は，子どもたちに体験の場を与えるものであるが，同時に農業者にとっても，思いを伝える場でありたい。農業の教育的機能は，農業・農村の場に存在すれば，発揮されるものではない。酪農教育ファームへ歩み出した農業経営者は，日々の農作業の中で起こる生き物や自然とのドラマティックなふれあいや感動を，限られた時間の中で，子どもたちに伝えようとしている。

今回の事例調査で出会った方々が皆，熱い思いを持ち，地域で活動されてきたことが，日本における酪農教育ファーム認証制度の創設により，大きなうねりとなって国内に広がり，多くの子どもたちに豊かな体験の場を提供できることを期待する。